

## 日本人の言語行動について

## — その記述的研究 —

王 宝 山

## 序 章

私の日本での研究期間是一年である。勉学にはあまりにも短かいものがあることは言うまでもない。従ってこの一年間は貴重なものになるわけである。限りのある期間内になるべく多くのことを勉強するのは私の最大の望みである。私は大学時代に日本語文法を専攻していたが、日本に来たのは初めてである。日本での暮らしでは本場の日本語に接する機会を逃して何となく今まで勉強して来た教科書の日本語と違うような感じがした。この暮らしの中の生の日本語は日本で暮らすなければ接触できないものがある。言葉と文法との関係においては、言葉は第一次的であり、文法は第二次的である。言い換えれば言葉があって始めて文法がある。よく考えてみれば人間がしゃべる言葉のうちには必ず一定の文化的な背景がある。その文化的背景を知ることは大切である。日本に来てからもなく私は暮らした中の日本語の生い立ちに興味を持つようになった。そして、その実例の収集に力を注いだ。そのうちに指導教官の沼本先生に自分の暮らした中の話し言葉についての研究が語学研究の第一歩であって言語の実態研究というもので、と教えて下さった。それをきっかけに日本語の実態研究をめざしにすゝことになった。

外国人として日本語の実態を調べるのは日本人と違って外国人なりの見方が見つかると思う。その違いというものはその人の国(母国)の文化的な背景を参照して日本のそれと対比しながら見ることが出来るのである。比べてみた結果、共通する部分も認められるが相異なる部分が目立つことになるわけである。この相異なる部分は即ち「文化的な差異」である。この文化的な差異は激しい衝突を伴うものである。従って外国人学習者の頭の中に与えた印象が深いのも当然であろう。一般的に言えば文化的な差異に支えられ言語現象には外国人学習者の言語勉学上の難点があるとこどもある。

初めて日本へ研究に来たこと、また、ただ一年間の期間の短かいこと、これらの客観的な条件のもとに日本語の実態研究を試みるのは一番いい選擇であろうと思う。

言葉の実態研究は広範な分野であり、この短かいレポートではとても全般的には述べられない。沼本先生の指導に従ってその中の「言語行動」にしぼった。

さて、言語行動とは何であろう。「国語学研究事典」には「人間の諸行動中、言語による行動で言語活動、言語行為などと云う。言語行動は人間の言語現象を総括的にとらえたもので、全体としては多様であり、混雑的である」という。いくつもの領域にまたがって物理的、生理的、かつ心的であり、それは個人的領域にも社会的領域にも属す

る。」(注④)とある。

さらに言語行動において口頭言語の研究がどういう現状であろうか。「学問の世界においても口頭言語は研究の対象に値しないものとして考えられる傾向が今なお強い。人間の生活が話しことばを媒介にしては考えられないという現実。またあらゆる研究や教育が書かれたことばによってのみでなく、話しことばによっても与えられているという社会的事実が存在するものにもかかわらずである」(注⑤)と、水谷修先生が言っている。まづ「批判」である。

話しことばを積極的にとらえることの意義を認識されたい。「われわれが使用している話しことばが一体どんなものであるか。その実態を把握することから始めなければならぬであらう。それは正しい話し方、きれいなことばと、その規範色の濃い見方に立つものではなく、あくまでもその生きた状態を冷静にみつめることから出発すべきではなかろうか」(注⑥)。

## 第一章 省略表現

### 第一節 言い切らない表現形式

日本語では書きことばよりも話しことばの方が言い切りでない文末表現が多く見られる。

例(1) [電話で]

A: もしもし、田中ですが (a)

B: 私が健太人の友達で三原というものですけど、健太人は (b)

A: あ、今ちょっと出ていますんですけど (c)

B: あ、そうですか。

A: 帰る、もう、こちらから電話させてもらいます。

B: はい、お願いします。

A: あのう、お宅の電話番号の方は (d)

B: はい、014-8679です。

A: はい、わかりました。どうもすみません。

B: いいえ、それでは。

(a)～(d)の部分は言い切らない表現形式である。文の構造から見れば不完全なものと思われるであらう。(しかし、実際にそうなのではない)。

とすると、これらの不完全な文を「完全な文」にすればどうなるか。

(a) もしもし、田中ですが、そちらはどちらでしょうか。

(b) 健太人はいますか。

(c) 今ちょっと出ていますんですけど、どういうご用ですか。

(d) お宅の電話番号のほうをお教え願います。あとで健にお伝えしますから。

これらの「完全な文」は外国人学習者にとって文の意味がとてつもなく重なり合っているが、しかし、日本人は決してそういうふうには言わない。つまり日本人にとっては分らないはずなのである。

例(2) [スーパーで、おつりが足りない場合]

客: すみません。おつりは。

店員：あ、そうですか。ご免なさい。すみませんでした。〔新におつりを済す。〕

「おつりは」まで言いつつ、これ以上言わない。つまりお客さん自分も言いたくないし、言わなくて相手(店員)が分ってくれると信じてわけである。

さらに次の例を見よう。

例(3)〔水族館で山椒魚を見てゐる互いに知らないAとB〕

A：おもしろいですね。これはどういう魚ですか。

B：まあ、動物ですけど。

例(4)

A：車は便利ですね。免許をとっておられますか。

B：ええ、一応とっていますけどね。

このように話し合ふの中にはあつちを表現せず、言ひまじのままで柔らかな言ひ切りを表現する言ひ方が沢山ある。外国人学習者はそれが非常に苦手である。

確かに日本人は話し合ふの省略表現を最大限に發揮している。伝達の世界では言葉はいつまでも思想より遅れている。思想の伝達は言葉にたよるものであるが、言葉だけでは、またうまく行かない。まして言葉の量的な累積よりも質的な簡略のほうが望ましい。人間は伝達へ無制限な希望をもっている。しかし、それに対して人間の言葉なと精神的なパワーが有限的なものである。この無限性と有限性とは矛盾している。矛盾した結果、経済的な言語行動が生じるわけである。

## 第2節 あいまいな表現

ある留学生の中さんの経験談であるが、「今日、飲みに出ますが一緒に行きませんか」と誘われて、「行きません」と言つて断つた。日本人の女子学生が「中さん、そんな言ひ方はちょっとずいずいですよ」と注意してくれた。何と言つても、ちういゝかをアドバイスをした。それは「今日はちょっと、ね」と、教えてくれた。「それだけで意味が通じるのか」と聞いて、「ちゃんと通じるよ」と言つた。この中さんは研究室の中で、「中さんは何でもけ、まり言ひますね」、「好ま嫌ひが多いですね」、「わがままです」などとよく言われたそうである。

日本語の暮らしの中の言葉においては、は、まり言わなくてもいい、は、まり言つても気がすくなる場合がかなり多い。

一番典型的な例が明治維新時代の西郷隆盛と勝海舟の対談である。そのとき、二人は何もいへずに目と目を合せて、分かつた——も(こ)こで戦争(そう)外国の植民地になるかう、そんなことに成つては日本が大変だ。将軍は政治力を天皇に渡そうと、決めたというこ(こ)とである。

自分の感情を素直に表現しようといふところに価値があると思われようである。次の例も同様である。

例(4)

A：明日、来てくれる？

B：明日はちょっと……。

大体的場合はこの「ちょっと」が来たら、相手(A)はすぐ反応を示すと予測される。しかし、相手は外人である場合、その反応はおそいか、全然ないことがよくある。その場合はやはりしほりにうなずいて相手の反応を期待する。Aが言語生活に慣れた人なら、この対話は続いていくだろう――

A: あ、そうですか。それじゃ、またお願いします。

B: はい。すみません。(後略)

上の例の「ちょっと」ということはポイントで、それをつかめなければコミュニケーションが滑らかに行われていかなくなる。

このような柔かな言葉づかいは日本以外の漢字文化圏の人間にとって多かれ少なかれ分るが、西洋人にはなかなか納得できないようである。しかし、実際このような経済的な言葉づかいは言葉自身よりも心の通じあいを信じることから生まれたもので、日本語の言語生活には欠かせないものとされている。

### 第三節 中性的な表現

世界で生産されるハイテク製品に占める日本製品の割合はビデオカメラ100%弱、ファクシミリ95%、複写機90%、VTR80%、ということである(注④)。日本製品が海外で人気があるのは事実である。品質がいいからとか、使いやすからとか、外観がきれいだからとか、いすれにせよ、体積が小さくてこぎれいなのは確かなことである。「われわれ日本人は物を作るのが下手だが物を小さくするのが上手だ」などとよく耳に入る。

言語行動において言うに、僅かな言葉にもなるべく多くのコミュニケーションを載せることである。

数多くの感動詞の中には「へえ」ということばがあるが、この「へえ」(平仮名)にいくつもの例を見よう。

例(5)

A: 伸子ちゃんもうキューイめに食っしんぼでせ。昨日はなんか「ソーサルト」でケーキをニコ食べたみて、パテも食べたという。

B: へえ。(驚き)

例(6)

A: あの人ほうそ入るぞよ。

B: へえ。(ただの反応。賛成でも反対でもない)

例(7)

A: つまらないうちのため、あの人にまんざんに怒られた。

B: へえ。(驚き。同情。しかし、自分の態度をあいまいにする)

上の例で分かるように話題に第三者の話が出ると、話は行かずまりになっってしまう。特にその第三者に傷をつけたり迷惑をかけたり自分の利益にかかわる場合は素顔で聞いている態度をとるのが無難である。人間関係を重要視される日本では、陰口、悪口、うわさ、評価などに非常に敏感なのである。

「へえ」はあいまいな言葉であるが、「はい」、「そのとおりだ」、「そうですか」、「なまはら」と同じく、あいづちの一つである。

## 第二章 自我介入を避ける表現

### 第一節 間接表現

水谷修先生は「日本語の実態」という本にこう書かれている。  
「日本人は事実を正確に適切に表現したり説明する習慣をもっていない。ちがひと言われるのである。これは確かに当たっているように思われる(注⑤)。

(しかし、日本語の話しことばに接すると、「うーん」(推定)、「そうぞ」(伝聞)、「みたいだ」(様態)などの助動詞や、「～というところだ」、「～って」のような引用的な表現が意外に多い。つまり、物事を実際のままに伝達すべきで、日本人は思っているのである。だから事実をそのままに伝達しようとするわけなのである。

例(8) [同じ話題のコミュニケーションはAからBへ、BからCへ、というふうに伝達されていく。最後にCからAへ、確認を加えられる。]

A: 私は今年4月から工学部が変わります。

B: そうですか。

B: Aさんは今年4月から工学部が変わるそうです。

C: (ほんと?)

A: わたしは4月から仕事は工学部が変わることになりました。

C: そううーんですね。

例(9) [AとBは電話でお話をしている。CはAと一緒にいる。]

A: 日時はどうなっているのですか。

B: 木曜の午後一時からです。

A: ちょっと待って下さい。本人に聞いてみますから。

[Cに向って] 木曜の午後一時から始まるそうです。いいですか。

C: はい。いいですよ。丁度聞いていますから。

A: [電話で] はい。もしもし、いいそうです。(後略)

例(10)

A: Bさんはまだ一人ですか。

B: うーん、わたし、もう結婚しているよ。

A: [Cに向かって] Cさん、もう結婚したんだって。

C: へえ、ほんとう？ 年はいくつですか。(後略)

日本人は自然を愛するということをよく耳にしている。確かにそう思われる。庭園を例にすると、僅かな庭でも山を作り、川を作り、つまり、自然を作る。それはほんとうの自然でないにもかかわらず、それは自然だ、日本人は思っている。

言葉の場合も同様である。場合によっては、この「うーん」、「そうぞ」などは外国人学習者におおきく「思」をさせるものとして、たいていいい、ちがひほうかいのものだと思われよう。

確かに中国語や英語などの場合は特別に「伝聞」、「言伝え」を

強調しない限り、このような言い方は使わない。

## 第二節 「～から」「～ので」表現

例(11)

学生：先生、明日、用事がありますから学校を休んでもいいでしょう  
か。

例(12)

A：あの一、ちょっとすみません、宿題はどちらで  
しょうか。

B：すみません、地元の人ではないんですから。

例(11)も(12)も正しい文で、何の間違いもない。しかし、言葉づか  
いに敏感な日本人はそれを次のように訂正するだろう。

例(11')

学生：先生、明日、用事があります人で学校を休んでもいい  
でしょうか。

例(12')

A：あの一、ちょっとすみません、宿題はどちらで  
しょうか。

B：すみません、地元の人間ではない人ですの  
で……。

例(11)の「から」は強い意志を表わす言葉で、「用事があるから学  
校を休んでも当然の前のことだ」ということになるおそれがある。学  
生は先生に言うものではない。

例(12)と(12')とを比べてみよう。「から」も「ので」も原因・理由  
を表わす接助詞であるが、「から」は原因・理由を主観的に表わすに  
対して、「ので」はそれを客観的に述べる。相手に道を教える能力の  
ないことを納得してもらうには「ので」が一番適いと言えよう。こ  
のような「人間不在」の言い方はもっとも無難である。「から」だと  
「教えられるわけじゃないんだ」、「教えられないのが当然だよ」、「  
どこから、分らないんだ」といって、想像される。しかし、「ので」は決  
して人にそういうひどい印象を与えていない。

要するに、原因・理由、言い分け、自己主張などの言い方は望ま  
ないものではないのである。

## 第三節 婉曲な表現

例(13)

イ、食べ物なんか、ほとんどないと言ったほうがいい。  
ロ、どうも日本人ほど非宗教的な人間はいないのじゃないかとい  
うに思うのであります。  
ハ、そういう、失礼と思われる仕方を避けたほうがいいかも知れ  
ません。  
ニ、それよりこの方がいいんじゃないでしょうか。という感じですね。  
ホ、よく分りませんけど、そう言われたら、そうでしょう。  
ヘ、すみません、ちょっと分りませんけど。  
ト、そうと云えそうです。  
チ、そういうふうに言えよう。

以上のように、説き及ぼすだけでなく、科学を論ずる文章にもよく  
ことう暖昧な推測というものが立ち入る。

「XはYである」とするところを「XはYであらう」、「XはYではないかと思う」、「XはYであると言ってよさそうである」、「XはYであると言えそうである」などとする。

日本語のポイントは語尾にある、とよく言われるが、上の例の場合にはむしろ語尾を無視してもよからう。これらは和文中訳の場合<sup>労苦</sup>すると二つともある。学問的な文章でも、どうも著者自身も自信がなさそうなのであるから、説得力が薄らげられてしまう。小説などなら、訳文は流暢さが欠けるため読ま樂しさが失われてしまう。

要するに、相手の存在を強く意識して、言葉づかいによって相手に傷をつけたり迷惑をかけたりしないよう、心がける。これは日本語の特徴の一つであらう。

こういう「さしあたりがない表現」が特に相手に忠告するときの場合によく使われている。忠告でも言葉を柔げて言う工夫をする。

### 第三章 相手と共にコミュニケーションを作る表現

#### 第一節 あいづち

第三者の立場から談話、或いは対話の場面を見ると、中国人、日本人、アメリカ人、それぞれ違う。一番印象的なのが日本人の談話の1かたである。それはほんとに「対話うー対話である。聞き手もうなずいたりあいづちを打ったり、反応を示すのである。アメリカ人や中国人の場合とは違うだろう。聞き手は静かに聞くだけである。少なくとも日本人ほど頻繁にあいづちをうって、うしろな。日本人の場合は相手のあいづちがないと、対話が進んでいかなくなる。だから、「そうぞすね」、「そうぞすか」、「あ、う」、「へえ」、「なにほで」、「ね」などがお話を進めていく潤滑油の役割を果たしている。それがないため、「僕の話はつまらなくて相手の気に入らないかな」、「相手に傷をつけたのか」などと話し手は思うわけである。

#### 第二節 話題の選択

女性同志の間ではよく自分の「彼」(主人かボーイフレンド)のことを話題にする。彼のことをほめないので原則である。とにかく、あまりいい言葉を使わない。(しかし話の終わりの部分に、「でもあの人はいい面もあるよ」とか、「でもね、やさしい人よ」というふうに何気なく軽く言っておく。

この僅かなことは実は全部話の中で一番大切な部分である。話のポイントがここにある。もし誰かが最初から「ほんとうに親切な人よ」など言ってしまう。

言語生活において、感情を逆に表わす一つの例である。

映画やテレビドラマなどで、次のような場面がよくある。

彼のことが好きなのに、「いやだ、いやだ」と言う。愛情を表わすには冷たい顔をしている。熱烈に「愛している!」というのが西洋の影響もうとされている。日本人は「言わぬが花」と言って言葉以外のものを信じているからだろう。

#### 第三節 共同の経験による伝達

あり、主としてスピーチなどでは日本語ほど決まらず、発言の方が多いものはない。

結んでは工場で一本ある。再び  
多量の山に日本  
表現を認められ  
「お決まり」は既に自分  
から紙葉の言の葉がよ  
うで手言るのを語をく  
よ辞やうに思ふ経験場  
は市集にいよう境場  
「武例。開きソビ同す  
華実りるコな。り  
はがチあさ「知た  
ご辞一であつた未  
つ祝むう確認にま  
主望スよを再験る省略  
披露「るらセニ経れ  
お披露「るらセニ経れ

娘に売ニニ共に成

## 結章

[illegible]

1989. 9.

注釈：①佐藤喜代治編「国語学研究事典」

② 水谷修著「日本語の生態、— 内の文化を支える語彙 — とは」  
創拓社 昭和54年7月 PP.4

③ 同上 P. 12

④「朝日新聞」 1989. 4. 17.

⑤ 水谷修「日本語の生態——内の文化を支える話し言葉」  
創拓社 昭和54年7月 pp. 88

(完)